

# イギリス英語の最近の発音傾向

乾 隆

## 0. はじめに

勤務の都合でイギリスに行くことが何回かあった。イギリス英語の特徴の一つは、地域方言、階級方言が多様なことが挙げられる。その点では相対的に均質なアメリカ英語に慣れている筆者にはイギリスで戸惑うことがしばしばあった。

たとえば、there を [ðe:] と発音する人に出くわした。イギリス英語は語末の r を発音しないという程度の知識は持ち合わせているので、[ðeə] と発音すべきところを、その人の癖でそのように発音しているのだと思った。ところがしばらくすると、この there [ðe:] の発音をほとんどの人がしている事に気が付いた。

また page を [paid<sub>3</sub>], pay を [pai] と発音する人々にも出くわし、最初はロンドンの下町の出身の人達かと思った。ロンドンの下町訛りの、いわゆる Cockney では [ei] を [ai] と発音するからである。ところが、その人達はロンドンの出身ではなく West Sussex の人で、労働者階級でもなく、大学関係者であった。

このような訳で、日本の教科書などに載っているイギリス発音と実際に使われている、生の英語の発音にはずれがあるのではないかと思いはじめた。そのずれ原因の一つに、日本の現在の英語教育が、少なくとも発音に関してはアメリカ英語一辺倒になっており、イギリス発音の情報が乏しいという点が考えられる。実際、文部科学省によるどの検定教科書を見ても発音は、アメリカ英語中心に編集されており、イギリス英語の発音は申し訳程度にアメリカ英語の横に添えられていたりする。またイギリス英語の扱いに、一貫性が

欠けているように思われる。また巷間の書肆に行っても「アメリカ英語」を標榜する書籍は「イギリス英語」のそれを、数と種類ではるかに凌駕している。これは日本人の多くがアメリカ英語を求めるからであり、需給のバランスにより、イギリス英語の発音に関する書籍や情報が少ないのである。

## 1. イギリス英語かアメリカ英語か

文部科学省の現行の学習指導要領では英語の発音に関し、アメリカ英語かイギリス英語のいずれを手本にしるとかの制約や指導は何もない。にもかかわらず、教科書の発音の記述はアメリカ英語が全くの主流である。筆者は以前はこの趨勢になんの疑いも持たなかったし、アメリカ英語が「好き」であった。しかし、ヨーロッパなどを旅行すると、そこではイギリス英語の発音が主流であるのに気が付くし、ホテルなどでアメリカ発音で話すと、まるで意図的に「これが英語ですよ」といわぬばかりにイギリス英語で返答された経験がいくらかでもある。率直に言うと、どうもアメリカ英語はヨーロッパではあまり好まれていない。というか、アメリカという国やアメリカ文化に対して、日本人が好きなほど、欧州人は好きではないらしい。ましてやアメリカに対する憧れのような概念は持ち合わせていないようだ。

アメリカ人と仲良しのはずのイギリス人でさえ、周囲の数人に尋ねた限り、旅行するならどこに行きたいかという質問に対して、「アフリカ」と答えた者は居ても「アメリカ」と答えた者は一人として居なかった。

以上は、イラク戦争より前の状況のことである。今アメリカは世界中から嫌われて段々孤立化の道を歩んでいると言って良い。アメリカを取り巻く状況はとてつもないものがある。なぜなら、今まで欧州やその他の地域が何千年という歴史を通して、失敗をもとに学習して構築してきた価値観や約束事をアメリカ人はものごとに見事に破壊して、ローマ帝国時代の国際関係の尺度に戻ってしまったからである。おそらく現在は、2000年の後も歴史の転換点として教科書に大きく扱われる時代である。そんな状況の中で、アメリカの信奉者であるかのように、アメリカの勢力圏外で日本人がアメリカ英語を話

すのは、ある種の危険性を伴う行為と言えるかもしれない。

筆者は、状況に応じてアメリカ英語とイギリス英語を使い分けられるのが理想だと考えている。もちろんこれ以外に、カナダの英語や、オーストラリアの英語が使い分けられるに越したことはことはないが、なかなかそこまでできない。前書きが長くなったが、きちんとしたイギリス英語ができることは、尊敬はされても、敵意を持たれることは少ないと思う。

そこで、本論では発音指導や学習の助けになるよう、今日のイギリス英語の発音の実情を分かり易くまとめて紹介する。

発音の例は、自分が実際に耳にしたものの他に、多くは文献によった。自分の採取した例も、それが単なる個人的な発音の癖でないことを裏付けるために、音声学関係の文献に当たって、裏付けの取れたものを呈示した。文献の中でも Cruttenden (2001) の第7章が Standard and Regional Accents の標題のもと、今日のイギリス英語を包括的に記述しているので、本稿も概ねそれ準拠することにする。

## 2. 容認発音

最初にイギリス英語の多様性について少し触れたが、日本人が範とすべきイギリス英語は容認発音、Received Pronunciation (RP) である。これは BBC 英語とも言われ、ちょうど日本の NHN のアナウンサーが使う日本語に相当すると考えられる。ただしこの RP の話者は数%程度と言われている。

イギリスは階級社会であるが、この RP をきちんと喋れることが上流社会に入る条件だと言われている。かのサッチャー元首相も少し労働者階級の訛りがあったから発音の訓練を受けたと言われている。

イギリスの田舎町で、筆者はコンビニが閉店していると知らずに入店し、買い物籠を持って店内を歩き始めると、店主が飛んできて、閉店している籠を置き、Closed! Put it down! と木で鼻をくくったように怒鳴られたことがある。そこで臆することなく、慇懃に謝り、近くに別のコンビニはないかと、自分なりに RP にできるだけ近く話した。すると店主の態度は豹変し、

～Sir を連発しながら大変丁寧に対応され、店の外に出て方角まで指し示してくれた。店主は筆者を、最初は汚いジーンズにTシャツの東洋の労働移民くらいに思って怒鳴ったのであろうが、その発する言葉で、その人品卑しからざるを知り、己の態度をがらっと変えたのであった。イギリスで言葉使いの重要さを身を以て感じた次第である。

Cruttenden はこの RP を更に、General RP, Refined RP, Regional RP の3種に分類している。General RP は最も標準的な容認発音で広く浸透している発音である。Refined RP は貴族の家柄とか、海軍将校など上流階級が占める職業と密接に結びついている。この話者は人数が減っていると言われている。その原因は、他の話者にはあまりに気どっているように聞こえ、時としてそのことがからかいの対照になるからだと言われている。Refined RP 独特の発音は/əu/の/ə/の部分がかかなり前寄りになる、つまり/əu/と「え〜う」の間あたりの発音になることが挙げられる。home, road などにこの発音が使われる。また/æ/が二重母音化されて/ea/となるのも特徴である。したがって、sad は「セアッド」に近くなる。この他にも、語末の/ə/と/ɪ/の口の開きがより大きいなどの特色がある。

Regional RP とはその用語自体に矛盾がある。つまり「地域的」でありながら「標準」の意味合いをもっているからである。これは地方都市などの上流階級や上昇志向の人に見られる標準英語であり、他の話者がほとんど気づかない程度のその地域独自の特徴を持った発音とされる。

### 3. 最近の容認発音の変化

Cruttenden は最近の容認発音の変化を定着度に応じて4段階にわけて紹介している。ここでは各音変化の列挙方法など Cruttenden を踏襲することにするが、例は多少独自のもとと入れ換えたり、日本語的な説明も加えて読み易さを心がけた。また、Cruttenden の説明では発音記号が特殊なものが多いので、印刷の都合上、部分的にカナ表記にするなどの工夫を試みた。

これらの音変化の中には、読者がテレビや映画などで耳にした発音があり、

ああこれだったのか、と思うものがある。定着度の高いものを除けば、必ずしも手本にしなくて良いと思うが、聴き取りの点では、これらの音変化に慣れていないと相手の言っていることが理解できなくなるので、やはり一通りは習熟しておく必要がある。

### 3. 1 完全に定着した変化

- (1) /ɔə/→[ɔ:] : この変化は/ɔə/と/ɔ:/の区別の消失を意味する。したがって、pour と paw はどちらも[pɔ:]になる。
- (2) /lj/, /sj/, /zj/ の/j/の消失 : 例) luminous [lu:mi:nəs], suit [su:t]  
この変化は日本の辞書でも/j/をイタリックにするなどして既に取り入れられている。
- (3) /eə/→[e:] : 冒頭で取り上げた there [ðe:]がこの変化に相当する。他にも hair が[he:]になったりするから、慣れてないと、文字通り「ヘー」と驚いてしまう。
- (4) /ou/→/əu/ : 以前はアメリカ英語と同じく komb [kəum], boat [bəut]であったがそれぞれ[kəum], [bəut]になっている。この点ではアメリカ英語はイギリス英語の古い発音を残していると言える。これは最もよく知られたイギリス英語の特徴の一つである。
- (5) アクセントの無い/tj/, /dj/→[tʃ], [dʒ] : これも日本の辞書に既に取り入れられている。例) culture [kʌltʃə]

### 3. 2 相当定着した変化

- (1) アクセントの無い/ɪ/→/ə/ : すべての語がこうではない。たとえば、quality にはこの変化が当てはまるが、palace では/ɪ/と/ə/の間で揺れている。また pocket は/ɪ/のままである。
- (2) /uə/→/ɔ:/ : 特に単音節語でよく当てはまるが、pure, dour などは当てはまらない。例) sure [ʃɔ:], cure [kjɔ:], poor [pɔ:], tour [tʊə]  
したがって、I'm sure. は「アィムショー」 tour guide は「トーガイド」のように聞こえる。
- (3) 語末の/ɪ/→/i:/ : 例) pretty, city, happy, dirty この点では日本語

発音の「ハッピー」「シティー」などに近くなる

- (4) /æ/はより口を開ける：大きな口を開けた日本語の「あ」に近くなる  
例) man, cat, sad, cap, rat
- (5) 子音の前の/t/→声門閉鎖音[ʔ] (実際の声門閉鎖音の発音記号は疑問符の下の点を取ったものであるがここでは[ʔ]で代用する)：ただし、little [liʔ] の様に/l/の前の/t/を声門閉鎖音にするのは substandard とされる。例) not very [nɔʔ veri]
- (6) /nj/→[n]：この変化はアメリカ英語でもかなり定着しており、たとえば New York が [njuɔ:rk] と発音されているのをよく耳にする。
- (7) /u:/→中高母音：/u:/は本来、後高母音であるが、この変化によってかなり前寄りになり、日本語の「うー」を円唇にすればよくなる。  
例) shoot, shose, food, boot, group
- (8) アクセントのある/tj, dj/→[tʃ, dʒ]：この変化も日本の辞書に取り入れられている。例) tune [tʃu:n], student [stʃu:dənt]

### 3. 3 最近の変化

この変化による発音は最近聞かれるものであるが、まだ大多数が使っているものではない。しかし変化が大きいものがあるので注意を要する。

- (1) /Iə/→[ɪ:]：二重母音の長母音化であるが、これは知らないと聞き取れないであろう、なにせ beer [bɪ:], ear [ɪ:]なのだから。
- (2) /uə/→[u:]：この変化は3. 2の(2)の変化、つまり/uə/→[ɔ:]の変化と競合状態にある。例) sure [ʃu:]
- (3) /u, u:/の非円唇化と前方化：/u, u:/は本来、円唇母音であるが、これを非円唇にして、更に前方で発音すると、日本語の「う、うー」に近い。  
例) good, put, wood, soon
- (4) /r/→有声唇歯接近音、有声軟口蓋接近音：この二つの音は発音記号が特殊なので音の名称で示したが、有声唇歯接近音は[v]の口型で唇と上歯の間に摩擦を起こさないように隙間をあけて出す音である。有声軟口蓋接近音は[g]の閉鎖を開いてその隙間で接近音を出す。dark [ɫ]を後

舌面の盛り上がりをもっと前方で発音するといえればわかり易いであろうか。これは後で述べる河口域英語の特徴でもある。

### 3. 4 容認発音になりかかっている変化

ここで述べる発音は、RPに次ぐ標準英語の位置をしめている河口域英語では、定着しており、RPになりかかっている。

- (1) dark [ɫ]→[u]: 本来の dark [ɫ] は舌尖を歯茎につけたまま後舌面を上昇させて [u] と発音していたが、完全に [u] で良いので、日本人にはとても楽な発音になる。日本人には I'll の発音などが難しいが、この変化を可とするなら「あう」ではほぼ事足りることになる。

例) fill [fiu], silk [siuk], milk [miuk]

- (2) /t/→[ʔ] (?は声門閉鎖音): 子音の前でのこの変化は既に扱ったが、ここでは、アクセントのある母音の前、または、ポーズの前で/t/が声門閉鎖音変になることを指す。

例) not even [nɔʔi:vɪn], need it [ni:diʔ]

アクセントの無い /ɪ, ə/ の前の /t/ に声門閉鎖音母音を用いるのは、Cockney では広く定着しているが、RP ではまだ見られない。

例) water [wɔʔə], fit it [fiʔiʔ].... どちらも非標準

## 4. 河口域英語

上で述べたが、RPの話者は数パーセントと少ない。これはRPがあまり気どった、取り澄ました英語と考えられることにも原因があろう。ロンドンを中心とする若い世代では、RPほどかしこまらず、労働者階級の社会方言である Cockney ほどは俗っぽくない、その両者を折衷した Estuary English (河口域英語) と呼ばれる英語がかなり浸透してきている。これはロンドンの Regional RP と呼ばれる地位を占めるようになっており、テムズ河の河口域にとどまらず、Home Counties と呼ばれる Essex, North Kent まで広まっている。この英語は特に若い世代に、stylish であると考えられ、Bristol, Liverpool, Newcastle, Glasgow などの地方都市にもひろ

まっている。これらの地方都市では、その地域での Regional RP とこの河口域英語とが競合状態にあると言われている。

河口域英語の発音上の特徴は、Cockney との共通点が多いが、Cockney に見られる、/h/の脱落や、/ʌ/の前方化、/θ, ð /→[f, v], /au/→[a:]などの変化は見られない。

大まかな河口域英語の音声特徴はおよそ次の通りである

- (1) dark [ɪ]→[u]
- (2) /t/→[ʔ] (声門閉鎖音)：子音の前では、ほぼこの変化が起こるが、語末や母音の前でも起こることがある。
- (3) /eɪ/→[aɪ]：例) late [laɪt]
- (4) /aɪ/→[oɪ]：例) light [loɪt]
- (5) /st/→[ʃt]：例) stay [ʃteɪ], steam [ʃtri:m], constant [kɒnʃtənt] この変化は日本人の幼児の「す」が「しゅ」になる発音に似通っているの  
で面白みが感じられる。

これ以外に、RPの特徴で述べた /tj, dj/→[tʃ, dʒ]の変化や/nj/→/n/などの変化も河口域英語には見られる。

## 6. その他の特徴とまとめ

最近の日本語では、断言的内容を上昇調で述べる若者が多く、非難の対象となっている。その傾向は若者だけにとどまらず、中年の大学教員にも見られ、それを聞くと戦慄を覚えるのは筆者だけだろうか。Cruttenden は General RP におけるこの傾向を「checking high rise の多用」と呼び、次の例を示して指摘している。矢印が音調を上げる場所を示している。

I was at Heath ↑ row yesterday.

They've got a new duty ↑-free shop.

まだ完全に定着しているわけではないが、この上昇調は段々と使われている



ようである。

これと同様に、日本の若者および、似非若者が、その話題に対する相手の認識度を無視して「～じゃないですか」とあたかも相手も知っているか、当然同意してくれるかのような言い方をすることがある。やはりこの言い方も、非難の対象になっているが、これと似た例が、Cruttenden は河口域英語で見られることを指摘し、次の例を示している。

I was woken up at 6:30 this morning; the postman came knocking on the door, didn't he?

この文末の didn't he がちょうど日本語の「じゃないですか」に相当して、これを 'unknown' tag interrogative と呼んでいる。もちろん Cruttenden は以上の2点に関して、日本語の最近の傾向との類似性があるなどとはは言及していないが、彼我の若者の言語感覚に共通性が見られて興味深い。

以上、イギリス英語の最近の音変化の特徴を述べてきたが、新しいと思っていたアメリカ英語が発音の点では古い要素を多く残していたり、イギリス英語が日本の音韻体系に近い方向に変化しつつあることがわかった。おそらく学習上は日本人にはイギリス発音のほうが容易であろう。

言語は国際政治や経済と密接な関係がある。現在、世界は歴史的な大転換の中にあることに鑑み、どのような英語を学ぶべきかという点に関しても考え直さなければならない時期に来ていると思う。本稿がそれに役立てば幸いである。

#### 参考文献

竹林滋(1996),『英語音声学』研究社.

竹林滋、斉藤弘子(1998),『英語音声学入門』大修館書店.

- Blakemore, Diane(1992), *Understanding Utterances*, Blackwell Publishers Ltd.
- Bradford, Barbara (1988), *Intonation in Context*, Cambridge University Press.
- Brown, Gillian (1993), *Listening to Spoken English*. Longman.
- Cruttenden, Alan.(2001), *Gimson's Pronunciation of English*, Arnold.
- Ladefoged, Peter (1993), *A Course In Phonetics*, Harcourt Brace Jovanovich College Publishers.
- Roach, Peter (2000), *English Phonetics and Phonology*. Cambridge University Press.